

13世紀のサン＝ドニ修道院付属聖堂改築 —トランセプトにおける「天上のエルサレム」の参照—

慶應義塾大学
徳永祐樹

本発表は、サン＝ドニ修道院付属聖堂の13世紀の改築（1231-81）において誕生した、正方形平面を持つ特異なトランセプト（交差廊、袖廊）について、図像学的観点から考察するものである。ゴシック建築の誕生と位置付けられる修道院長シュジェールによる12世紀半ばの改築に対して、13世紀の改築は、レイヨナン・ゴシックの最初期の作例としての様式的位置付けに焦点が当てられてきた。また、サント＝シャペル研究を中心に、パリ13世紀美術・建築とルイ9世の政治的意図との関係が論じられるなかで、サン＝ドニ研究においても、13世紀半ばに導入されたフランス王家の霊廟プログラムについて、王家と修道院の関係が指摘された。そして、広大なトランセプトは、もっぱらこの霊廟プログラムのスペースを確保するという目的が強調されてきたのである。

発表者は、トランセプトの平面が、ヨハネの黙示録において記述される、一万二千スタディオン四方という「天上のエルサレム」の寸法と幾何学を参照していることを指摘する。S. McK. クロスビーの指摘したように、平面の寸法には、当時の王領で使用された単位ピエ（仏：pied、1ピエ \approx 0.325m）が用いられた。13m四方の正方形である交差部のベイを始めとして、トランセプトと身廊は、おおよそ、13m（40ピエ）とその半分の6.5m（20ピエ）のモジュールによって設計されているのである。その結果、聖堂の中央に、39m四方、すなわち120ピエ四方の広大な正方形の平面が生じる。これは規則的なベイの寸法に加え、トランセプトにおいては前例のない、二重の側廊が採用されたことに起因している。内陣との連結部分における平面の歪みを甘受していることを鑑みれば、正方形平面と寸法が、黙示録を参照するために意図的に採用された可能性がある。また、寸法に加え、12分割を基調とするトランセプトの巨大で革新的なバラ窓も、エルサレムを構成する「12の宝石」の参照として解釈できる。

黙示録の記述に依拠した正方形平面の天上のエルサレムの図像として、ベアートゥス黙示録註解書の写本挿絵が挙げられる。とりわけ、同時代のカスティーリャ王国で制作された写本が、カスティーリャ王家出身のルイ9世の母、ブランシュ・ド・カスティーユを介して平面のイメージソースとなった可能性を提示する。また、他でもなくサン＝ドニにおいて、特異な参照手法がとられた背景として、「聖堂献堂の祭日」の典礼における黙示録からの引用に加え、13世紀前半において未だ意識されていたシュジェールの著作と聖堂に根拠を求める。サン＝ドニにおいては、とりわけ石とステンド・グラスからなる建築によって天上のエルサレムを参照することに意義があったのである。最後に、トランセプトの形式が、霊廟プログラムによるカペー朝正統化のプロパガンダの中で持ち得た意味について考察する。